

清泉カトリック センター便り

第19号
平成27年
12月1日

【編集・発行 カトリックセンター】

今月のみことば

「言（ことば）は肉となって、
わたしたちの間に宿られた。」

（ヨハネによる福音書1章14節）

わたしの生涯を 信仰と寛大さによって
織り上げていく布としよう

― 聖ラファエラ・マリアー

降誕祭 (Christmas)



ボッティチェリ ラーマ家の東方三博士の礼拝
1475～76年ごろ ウフィツィ美術館（フィレンツェ）

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」（ルカによる福音書2章11・12節）

ベツレヘムに一人の幼子がお生まれになった。この単純な出来事が、人類の救いに大きな違いをもたらすことになりました。

教会における暦の上で、この季節は待降節 Advent と呼ばれ、救い主イエスの降誕を待ち望む時期とされます。救い主の誕生を祝う降誕節を準備する期間でもあります。年間の暦は待降節をもって始まりますので、この時期は新しい年暦になるときでもあります。

神の独り子が馬小屋で、誰にも知られずにひっそりとお生まれになった。救い主が王宮ではなく、貧しい馬屋で生まれたことの意味は尽くせません。「言（ことば）は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」（ヨハネによる福音書1章14節）神の独り子が私たちのあいだに住まわれたという、この神の受肉の意味はキリスト教の秘儀の中心をなすものです。

神は「不動の動者」のように世界の高みから人間や世界、組織や社会を右へ左へと動かすのではなく、神の言葉であるその独り子をこの世に送り、人間の姿を帯びてこの世の歴史に入ることで、私たちの一人ともなされました。その理由については、「神は、その独り子をお与えになるほどに、世を愛された」（ヨハネによる福音書3章16節）と触れられています。西洋の中世期を通してこの世を忌避すること *fuga mundi* 「この世にあつて、この世のものとならない」よう教えられることもありましたが、他方でこのヨハネの言葉は神が「世を愛された」ことを宣言しています。この世は避けるべき場、忌み嫌い、軽蔑する場ではなく、神の愛の対象であり、その救いの歴史が展開される舞台です。神がその独り子をこの世に送り、私たち人間に与えてくださったという神秘は、驚きをもたず受けとめることができなほど大きな謎でもあります。この待降節のときに、神の救いの神秘とこの世の不思議に少しばかり思いをいたしてみたいかがでしょう。

(M・F)

クリスマスプレゼントの起源は、東方の三博士が主の降誕を拝し、献げた贈物にあるといわれています。

右上のボッティチェリの絵はまさにその礼拝のシーンを描いたものです。

この絵は平成28年1月16日～4月3日
東京都美術館に来日の予定です。

